

### Ⅲ 大阪の顔：大阪駅前と御堂筋

近代に入ると大阪駅前と御堂筋が、大阪を代表する新しい顔となった。それまでの大阪城から延びる大川にそった東西を軸とした構造から、新たに整備された御堂筋（1937年竣工）と大阪駅（1943年竣工）による南北を軸とした構造への一大転換をはかったのだった。これらは大大阪の大玄関としてふさわしい風格を備えたものとして計画された。時を経て、JR、地下鉄3線、阪急、阪神が乗り入れる大阪駅周辺は、いまでも西日本を代表する交通の要衝だ。そして大阪駅北地区には昨春開業したグランフロント大阪をはじめ、関西・大阪の都市再生の切り札としての役割が期待されており、その重要性はますます高まっているといえるだろう。

大阪の玄関口に相応しい駅前空間を実現しようとする構想は、大阪の都市計画の草創期からの重要テーマであった。1919年の大阪市区改正設計からその構想はスタートしている。戦前期は主に駅や街路を中心に整備が進められ、戦後は、戦前からの構想を引き継ぎつつ、道路交通対策や建築物の不燃化、不足する都市施設の充実といった課題にも対応して、1961年に制定された市街地改造法の適用を受け、大阪駅前市街地改造事業（通称ダイヤモンド地区）として実施された。複雑な権利調整を行いつつ、建築物を含む一体的な整備を行う方法で、これによって整備されたのが大阪駅前第1ビル～第4ビルであった。当初のマスタープランは東畑謙三により策定され、高層ビルの圧迫感の軽減、モータリゼーションの進展といった問題意識から、高層部のセットバックや昇降車路などが盛り込まれていた。本事業は20年を超える長期にわたる期間を経て1983年に大阪駅前第4ビルの完成に至るが、その間、何度も計画変更がなされている。既存の権利者が入居している性格上、特に地下はその店舗構成が多様で、飲食店や居酒屋、喫茶店、チケットショップ、カメラ屋、レコード店、パチンコ店などがひしめき合う独特の雰囲気を生み出している。店舗の入れ替わりも激しいなか、当時の面影を残すのが大阪万博の年、1970年に完成した大阪駅前第1ビルの地下にある喫茶店マヅラ（設計：祖川尚彦建築設計事務所）だ。未来志向あふれるデザインは、きらびやかなビル内装とあわせて、あの時代を表現している。

これからも大阪駅前周辺は時代を先取りする取組みが絶え間なく続けられ、その姿を変えていくだろう。

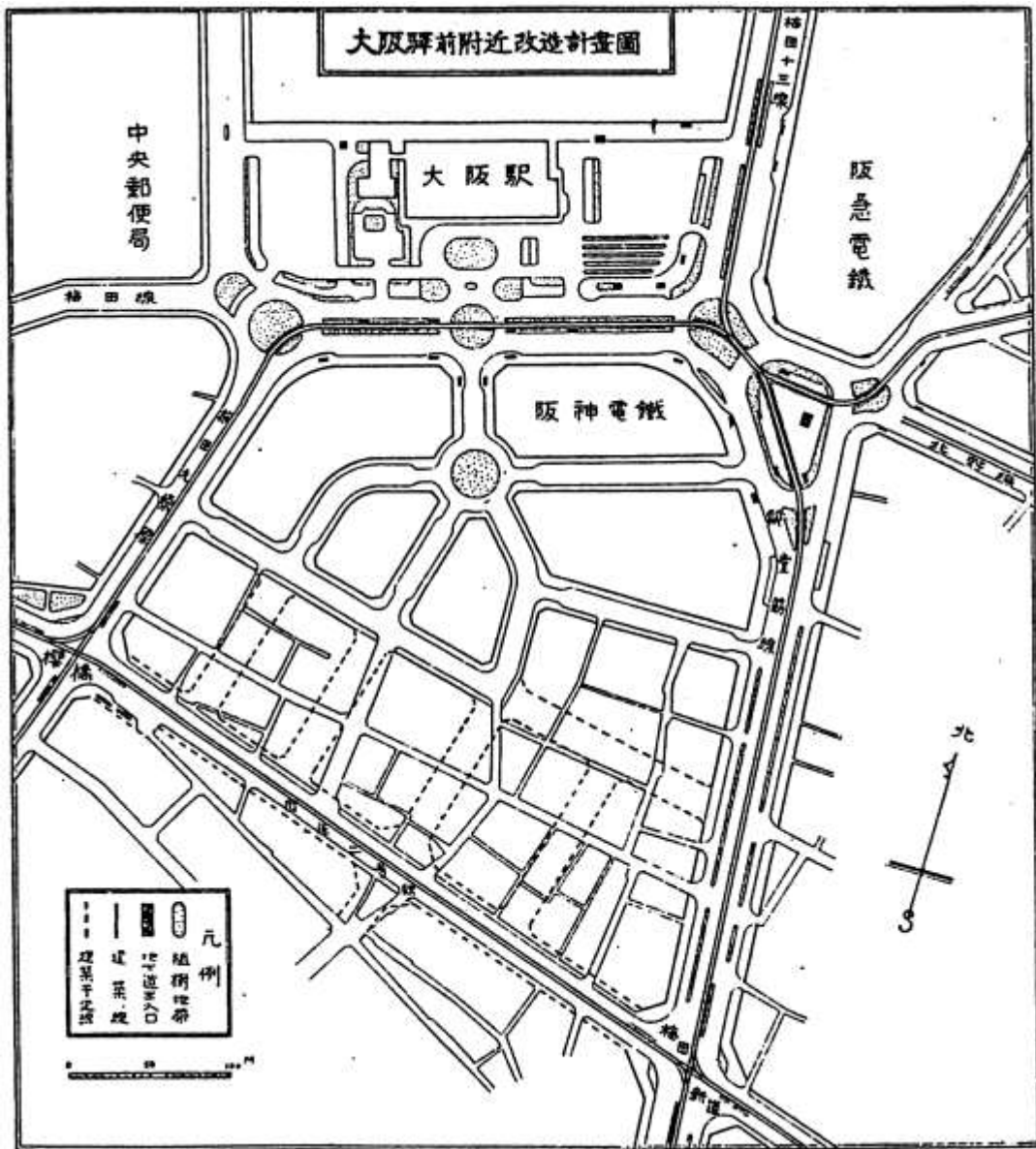


図 大阪市土木部の宮内義則による大阪駅前附近改造計画図  
 (出所 宮内義則 (1940) 大阪駅前改造事業に就て, 道路, 1 卷 9 號, p86, 日本道路技術協會)



図 大阪駅前市街地改造事業当初計画パース  
(出所 大阪市都市整備局 (1985) 大阪駅前市街地改造事業誌 p111)

駅としての玄関口・大阪駅に対して、大阪のまちの顔として計画されたのが御堂筋だ。第七代大阪市長関一によって計画された御堂筋は、当時としては破格の二十四間の幅をもつ四列並木の広幅員街路であった。近世から成立していた大阪の都心にこれだけの街路を拡幅整備する苦勞は並大抵ではなかったことは各種の記録に残されているが、関一や片岡安など当時の都市計画を担っていた中心人物らは、単に道をつくるだけでなく、その沿道にどのような街並みが形成されるべきかという点に深く関心を寄せていた。当時木造2階建てが主流の時代にあって、大大阪の顔として整備する御堂筋沿道には美観を添えた近代的なビルディングが林立すべきであると考え、それを実現するための敷地造成や建築規制なども綿密に検討していたことも当時の文献から確認できる。

戦前では、船場に**大阪ガスビル** (1933年：安井建築事務所 [安井武雄])、**日本生命保険相互会社本館** (1938年：長谷部竹腰建築事務所) といったオフィスビル、心齋橋・難波には百貨店建築が建ち、この大構想は徐々に形づくられていく。実は、御堂筋に鉄筋コンクリートの大規模ビルが建ち並ぶのは戦後高度経済成長期のことだ。この時代に

は時代の最先端をいく新しいビルが競うように建てられた。御堂筋は、先端技術のショーケースのような存在であった。**御堂ビル**（1965年：竹中工務店[岩本博之]）、**御堂筋ダイビル**（1964年：竹中工務店）、**本願寺津村別院「北御堂」**（1964年：岸田建築研究所[岸田日出刀]）など、御堂筋沿道の建築はそれぞれ個性をもちつつ、その集合体としての御堂筋の街並みを形成していった。その姿を戦前から思い浮かべていた先駆者たちの構想力には驚かされる。こうした歴史を受け継ぎつつ、先端のビジネスをリードしつづけてきた御堂筋は、これからも変化しながら時代を象徴する大阪の顔として発展していくはずだ。（嘉名光市）

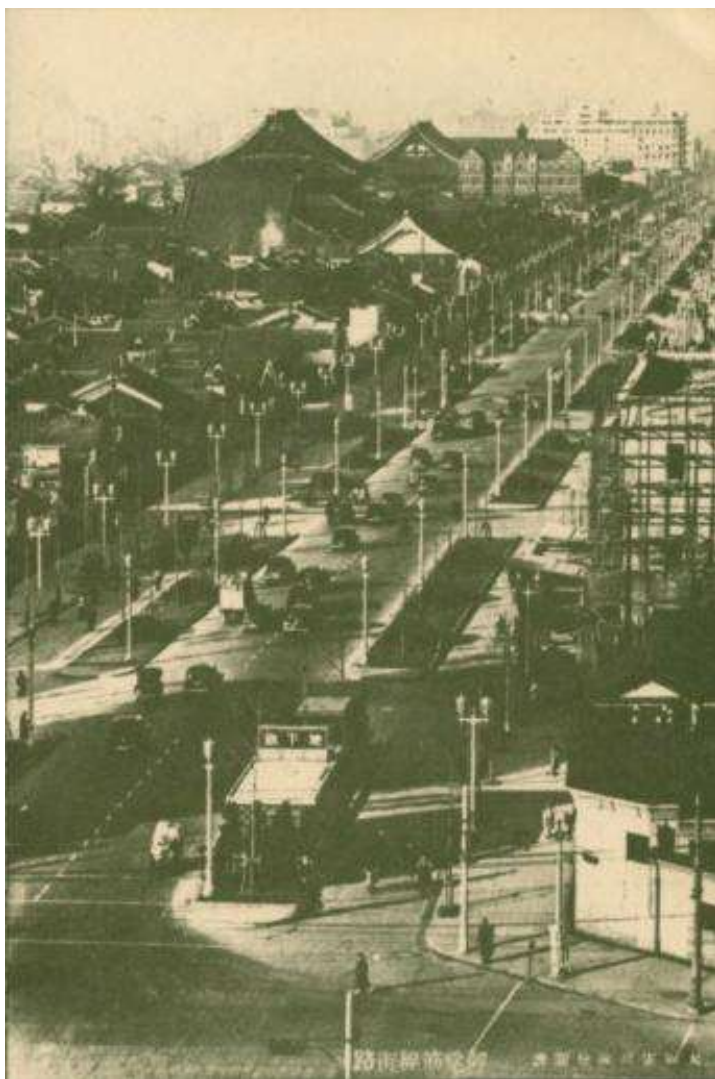


写真 竣工当時の御堂筋  
大阪市（1937）御堂筋竣工記念誌より

70年大阪万博の空気を持ち続ける  
「宇宙」をイメージした喫茶空間

## 07 マヅラ（大阪駅前第1ビル）



大阪駅前第1ビルの地下1階、エレベーターホール正面に100坪の広さをもつマヅラは、戦後ヤミ市と化したこの地の一角で開店した15坪の喫茶店がそのはじまり。日本初の市街地改造事業によって1970年に完成した駅前第1ビルに出店する際、日常を忘れてリフレッシュするにはどんな空間が良いかと考え、「宇宙」をイメージしてデザインしたという。天井は星空を思わせ、衝立などの家具デザインは当時のSF映画に出てくる宇宙船のようだ。キングオブキングスなどの姉妹店があり、そのインテリアも1970年代的で素晴らしい。(高岡伸一)

所在地：大阪市北区梅田 1-3-1  
建設年：1970年  
構造・規模：SRC造  
設計：祖川尚彦建築設計事務所

御堂筋とともに歩み続けている  
大阪を代表するモダニズム建築

---

## 08 大阪ガスビル



昭和初めに描かれた都市生活の未来が、明るく伝わってくる。大阪ガスの本社として建てられ、オープン当初は地下1階から2階がガス器具の陳列場。焼菓子から蒲鉾まで実演調理して、ガスの良さを紹介していた。大阪の欧風レストランの草分けの一つとされる8階ガスビル食堂は、今も健在。設計は大阪倶楽部と同じ安井武雄だが、こちらは時代の最先端を行く幾何学的な外観で、都市改造の一環として拡張された御堂筋に適合している。戦後に増築された建物の北側半分が、そのデザインを生き生きと引き継いでいる点も見どころ。(倉方俊輔)

旧 称：大阪瓦斯ビルディング  
所在地：大阪市中央区平野町 4-1-2  
建設年：【南館】1933年  
          【北館】1966年  
構造・規模：SRC造8階、地下2階  
設 計：【南館】安井武雄建築事務所（安井武雄）  
          【北館】安井建築設計事務所（佐野正一）

品格ある佇まいがメインストリートのイメージをリードしてきた  
御堂筋の代表格

---

## 09 日本生命保険相互会社本館



1889年に創立された日本生命は、1902年に現在の地に本店を構えて以来、1世紀以上もこの地で営業を続けている。最初の赤レンガの洋館が建てられた頃、御堂筋はまだ細い街路に過ぎず、正面玄関は心齋橋筋に面していたが、1936年に御堂筋に面した現在の本館建設が始まった。しかし戦争の影響によって北半分が完成した時点で工事は中断、戦後はGHQに接收され、1962年ようやく全体が完成したという数奇な運命を持つ。花崗岩に覆われた端正な外観は今なお「御堂筋らしさ」の源泉であり、周辺一帯ではこれからの御堂筋のために、上質な街づくりが進められている。(高岡伸一)

所在地：大阪市中央区今橋3-5-12  
建設年：【1期】1938年 【2期】1962年  
構造・規模：SRC造7階、地下3階、塔屋3階  
設計：【1期】長谷部竹腰建築事務所【2期】日建設計

名のとおり、御堂筋の中心に建つ  
建設会社を体現する本社ビル

## 10 御堂ビル [竹中工務店大阪本店]



幅広い御堂筋に向き合っても負けない建築の永続感を、どうしたら近代的なデザインで獲得できるのか。説得力のある解答を出したのが、このオフィスビルである。敷地境界より建物の四周をセットバックさせることによって、十分な空地を確保し、どの面も等しい環境をつくることに配慮されている。1階の床を道路から約1m下げてエントランスホールとし、9層のオフィス空間を合理的に確保した。最高高さ 31m という当時の法的制約や周辺条件を逆手にとって建築の凝縮感を生み出し、茶褐色のタイルで覆われた外観によって都市的に統制された美と、日本の伝統建築につながる細やかな肌触りの両方を感じさせている。大阪に生まれ、竹中工務店の設計部長を務め、この翌年には校倉造りに範を取った国立劇場を竣工させた設計者・岩本博行の手腕が光る。(倉方俊輔)

所在地：大阪市中央区本町 4-1-13  
建設年：1965 年  
構造・規模：SRC 造9階、地下4階  
設計：竹中工務店（岩本博行）



メタリックな素材や角の丸い窓が  
昭和40年代当初の空気を今に伝える

---

## 11 御堂筋ダイビル



ステンレスの外装がメタリックな輝きを放つ御堂筋ダイビルは、1964年に現在のマツダの支社として建てられ、御堂筋に面したショールームには、当時最新のスポーツカーが展示されていた。デザインも角の丸い窓など乗り物を感じさせるが、設計者は高精度な工業製品としての乗り物を目標に、外壁をユニットに分割して工場で生産するなど、建築の工業化に取り組んだ。既に解体された新朝日ビルや建て替えが予定されている新阪急ビルなど、この時代に竹中工務店が数多く送り出した金属外装ビルの、今や大阪における代表的存在といえるだろう。現在はダイビルがテナントビルとして活用している。

(高岡伸一)

旧称：東洋工業大阪支社ビル  
所在地：大阪市中央区南久宝寺町4-1-2  
建設年：1964年  
構造・規模：SRC造8階、地下3階  
設計：竹中工務店

南御堂（真宗大谷派難波別院）とともに  
御堂筋の名前の由来のなった船場のシンボル

---

## 12 本願寺津村別院 [北御堂]



信心が過去のものではなく、現代に生きているからこそ、寺院の形も変わり得る。本願寺津村別院 [北御堂] は、全国的に見た時にも、戦後に大胆な形態を採用した由緒ある寺院の筆頭である。1945年3月の大阪大空襲で焼失した江戸時代以来の木造伽藍に代わる建物を、弟子の丹下健三を世界的建築家に押し立てたことで知られる岸田日出刀が設計、丹下の代表作である国立代々木競技場と同じ1964年に完成した。都市的なスケールを持った鉄筋コンクリート造の構造物に本堂やホール、事務室といった複数の機能を集約させ、近代的な合理性と空間性を獲得している。市街地にあつて南御堂と共に船場商人の信仰を集めてきたという日常的な伝統と、戦後の新しい気概の双方が無くては生まれなかった建物だ。(倉方俊輔)

所在地：大阪市中央区本町4-1-3  
建設年：1962年  
構造・規模：RC造、一部S造6階、地下1階  
設計：岸田建築研究所（岸田日出刀）